

芸術の機能を見出すのは誰か

—— 鑑賞者、制作者、制度のフレーミング

筑波大学 Jean Lin

本発表では、芸術の定義における機能主義を、環境美学等で用いられるフレーミング概念の下で捉え直すことで、対立する立場にある制度主義との統合を図る。

機能主義とは、端的に言えば、芸術の機能—美的経験を提供する—を果たしうる人工物を芸術とみなす立場である。機能主義的な考え方のメリットは、伝統的な美的観点に基づいた芸術の概念、および一般的に広く受け入れられている〈芸術〉という語の使用法に寄り添える、ということである。しかし、機能主義には、次のような問題点が指摘されている。第一に、例えば〈泉〉のように既存の芸術の機能を果たさない作品を説明することができない (Davies 1990)。第二に、芸術の機能を果たしうる人工物を全て芸術と見なすことは、あまりに広範囲の事例を芸術として認めることになるとして、芸術の境界を適切に示すことができない (Fokt 2015)。

これらの問題は、芸術の機能が誰によって、どのように決定、実現、判断されるのかということ、機能主義者が明確に示していないということに起因すると考えられる。本発表では、あるものが芸術作品であるためには芸術の機能を有している必要がある、という点では機能主義に賛同しつつ、それに加えて、芸術の機能が誰によって、どのように決定、実現、判断されるのかということを確認にする。その手段として、日常美学や環境美学で用いられているフレーミング概念を導入し、鑑賞者、制作者、制度それぞれのフレーム(観点)がどのように芸術の機能に関与しているのかを分析する。

第一節では、鑑賞者のフレームと制作者のフレームとを区別する。芸術作品の鑑賞経験は、それがあらかじめ与えられたフレームから享受されるという点によって特徴付けられる(青田 2020)。したがって、制作者のフレームなくして鑑賞者が自らのフレームから対象に芸術の機能を見出す場合、それは芸術作品の鑑賞経験ではなく、環境や日常の鑑賞経験、あるいは、制作者が作品を制作する過程においてフレームを構築する行為に近いものであるといえる。一方で、芸術の機能の実現において、制作者のフレームだけでは不十分な場合もある。第二節では、一部の事例が芸術の機能を果たすためには、制作者のフレームに加え制度のフレームも必要となる場合があると指摘する。第三節では、芸術の境界を見極めるには機能主義と制度主義両方の観点が必要であることを示す。

本発表の見解は、芸術の境界の曖昧化が進み、芸術らしからぬ芸術と芸術らしい非芸術が入り乱れる現状において、帰属が不確かな事例を考察する枠組みを提供すると同時に、芸術の定義の機能主義と制度主義という既存の対立する言説を統合し、新たな芸術の定義として提案するという点で意義がある。